

脳結節性病変の一例

関西労災病院 病理科¹⁾、脳神経外科²⁾

木村勇人¹⁾、KHOO HUI MING²⁾、瀧 琢有²⁾、星田義彦¹⁾

症例：40歳代、女性

主訴：頭痛

既往歴：特記すべきことなし

現病歴：

約1年前から頭痛があり、痛みのため夜間に覚醒することもあった。近医にて脳梁に約2cmの腫瘤を指摘されたため当院脳神経外科に紹介、脳腫瘍の疑いにて開頭腫瘤摘出術施行となった。

入院時現症：

眼球運動、視覚・視野、瞳孔に著変なし。四肢の筋力低下なし。感覚障害・協調運動著変なし。脳梁離断症状は認められず。

検査結果：

(頭部MRI) 脳梁幹正中部においてT1・T2ともにlow intensityを示すmass lesionが認められ、病変部周囲の脳実質は中等度～高度の浮腫を伴っていた。Gd造影にて病変部周囲に造影効果が認められた

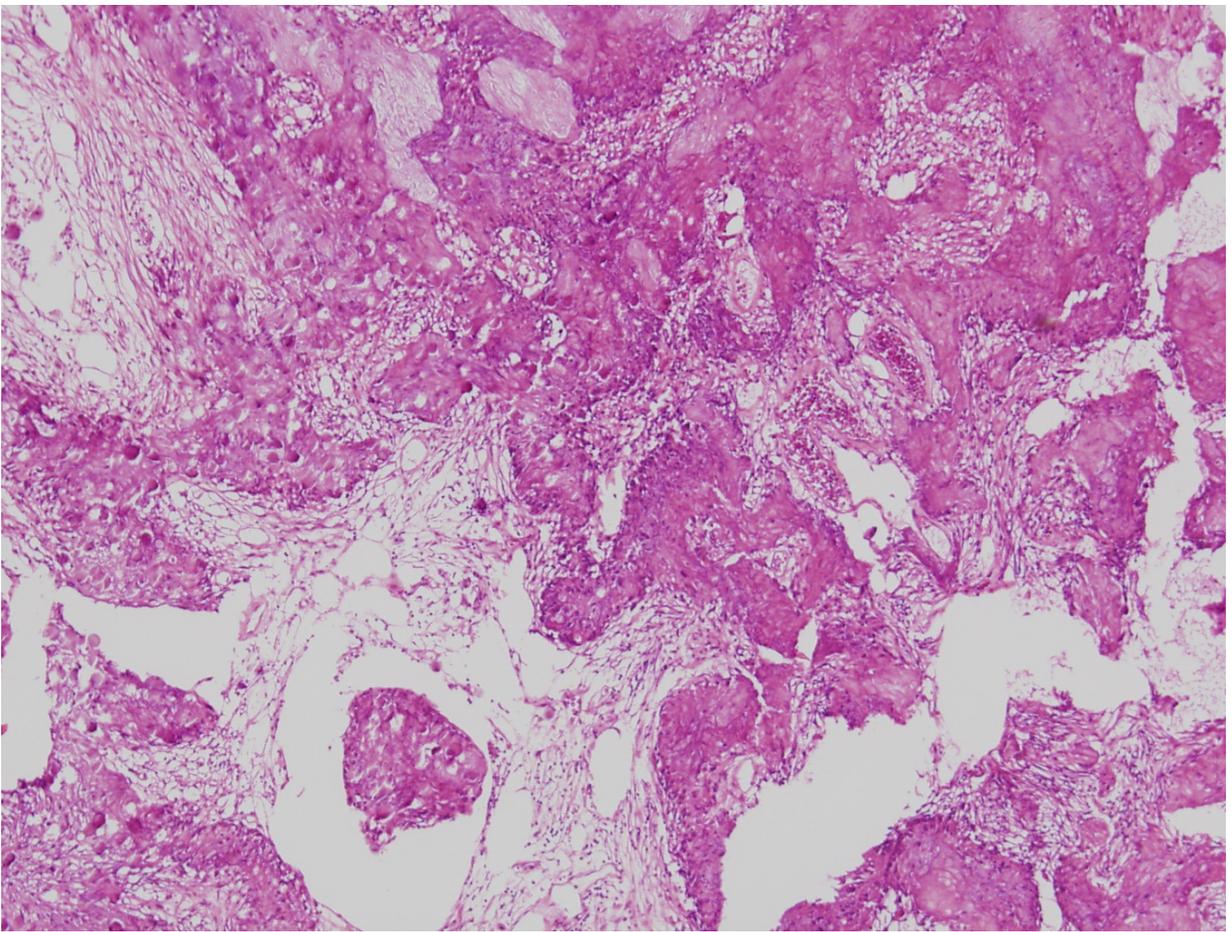
(頭部CT) 石灰化を伴う約2cm大の病変が認められた。

(脳血管造影) hypovascularな病変が認められた。

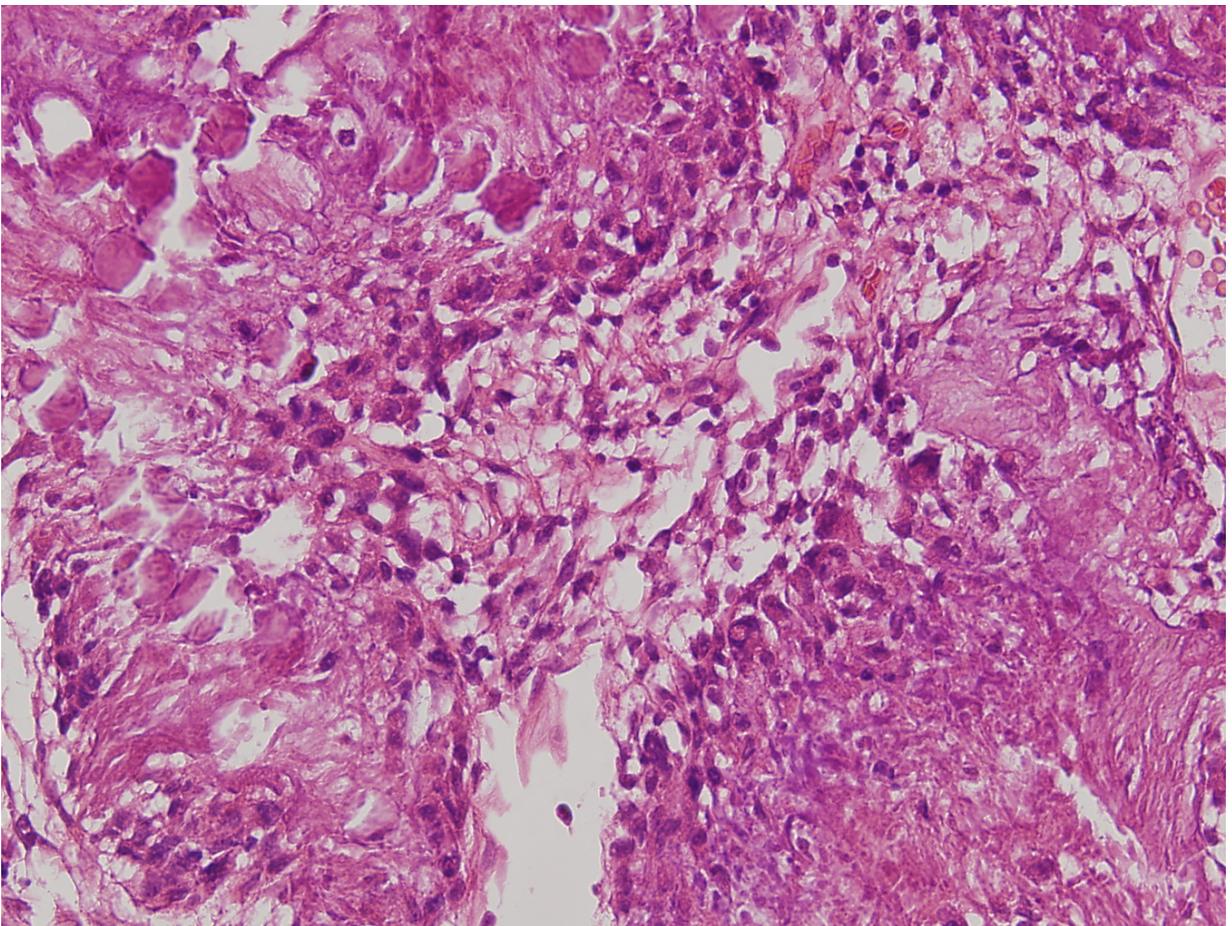
術中所見：

脳梁体部実質内において、血管網からなる被膜を有する約2cmの病変が認められた。病変内には前大脳動脈末梢枝が貫通していた。

問題点：病理組織学的診断



画像1



画像2